青莊館李徳懋文学における思想的基盤と公安派詩論の受容様相研究

金　昞國（建陽大学）

1 問題提起

青莊館李徳懋（1741～1793）は、李朝時代、正宗王の15番目の王子である茂林君の11代の孫であり、1741年（英祖朝17年）、漢城（現在のソウル）中部、寛仁坊、大寺洞（現在の仁寺洞）付近の本家で、通徳郎である李聖浩の長男として生まれた。青莊館は、学問の師匠は、特別にいなかったが、天性的に学問を好み、独学で勉学に励んでいた。

> 幼いとき、一日中、家の人たちが彼の所在がわからなくなって探しまわったが、夕方、庁舎後ろの壁の草むらで見つけ出したが、そこの壁に張られている古文を読むのに没頭していて、いつも日が暮れるのも知らなかった。まさに学問を好んだのは、彼の天性である。[1]

> 幼い頃から人に学問の教えを受けず、王考（祖父）が『十九史略』を教えたので、太古からの注釈を詳細に考察し、その重要な言葉を書きとめたが、疑問視される所や難しい個所を聞き、理解できないときは、必ず深く考え、その本来の意味をわかった上で、満足して笑った。そうでない場合は、初めから繰り返して読み直し、飯も食べるのも忘れてしまうくらいだった。
> また、その日に習得する分量を習わないと、泣きながら教えてくれるようねだったり、王考（祖父）の留守の時、内容が理解できなかったりすると、必ず本をもって隣町の長老に出向いて聞いたりしたので、『史略』一冊を全部読みつくす前に、文理が通暢した。なお、文を読むときは、壁に5時をしめすように日時計をかいておき、その時になると、友達との遊びをとりやめて、大人の言う前に1時間に10回、１日50回、読み上げるのを日課とした。[2]

---

[1] 李光葵、「先考府君의 遺事」、附錄 『刊本 雅正遺稿』 第8卷
幼時 家人嘗失所在 向夕 於廳壁後積草間得之 盖耽觀塗壁之古書 不知日之暮 其嗜學卽天性也

[2] Ibid.
自幼未嘗受學於人 王考先教十九史略 自太古 考其注釋 鈔其緊要語 問其疑難 未及領會 必坐靜處 深思抽繹 得其歸趣 始怡然而笑 否則上下反覆 以至忘食 或未課學 則挽長者衣

青莊館は、幼いときから学問に優れた才能と情熱があったようである。その結果、彼は、一生、渉猟した本が数万巻にのぼり、書き写した書物も数百巻になるという。そして、一生、12巻の著書を出したが、『嬰處稿』[3]『青莊館稿』[4]『耳目口心書』[5]『士小節』[6]『清脾録』[7]『紀年兒覽』[8]『蜻蛉國志』[9]『盎葉記』[10]『寒竹堂涉筆』[11]『禮記臆』[12]『宋史補遺傳』[13]『磊磊落書』[14]である。
このように青莊館は、読書量の豊富さによって百科全書的な知識を習得した。

だから、青莊館の文学を理解するためのさまざまな方面の努力が行われており、その研究のアプローチも多様である。まず、一つ、伝統的な朱子学的文学観の立場からのアプローチ、二つ、原始儒教に根拠する朱子学的な世界観と脱朱子学的な面が共有しているという立場からのアプローチ、三つ、実学の立場からのアプローチ、そして、青莊館の文学思想の中での復古（擬古）主義と公安派から受けた影響の様相を把握しようとするアプローチなど、その方法は、多様である。

本稿では、青莊館の文学思想の系統と公安派の理論の受容様相を明らかにするとともに、青莊館は、朱子学と公安派の理論をどのように自己化したのかをきわめることにある。

2 李徳懋の学問と文学に対する態度：酌古斟今、中道

青莊館の学問に対する姿勢がどうであったかは、次の文に端的にしめされている。

泣而隨之 王考若出門 而文義有未曉處 必挾冊 肩負於人 就隣里長老問之 未盡史略一篇 文理已通暢 如宿講 其讀書也 晝日晷于屋壁 爲五時 時至則雖與羣兒遊嬉 盡棄戲具 不待長者之警 而一時讀十遍 一日爲五十遍 日以爲課

[3] この冊は、青莊館の小時に著述した詩文として身持ちと行実の慎みを子供や処女のようにすべきことを言うものとして稿名をつけたものである。

[4] この冊での青莊は、鴆鵲（青い白鷺）の別名として江湖に暮らし、營爲するものもなく、専ら前の肉のみを食べたので、一名 信天翁といい、これを自號にしてこれをもって冊名にしたのである。

[5] この冊は、まさに耳で聞いたもの、目で見たもの、口で言ったもの、心で思ったものなのである。

[6] この冊は、昔の聖賢の訓戒を集めて箴警を作り、昨今の人の卑近なことを集めて、觀感の資料にしたものである。

[7] この冊は、古今 名人の詩話をのせたものである。

[8] この冊は、上古 時代から始まり、明・清及び春秋時代小国に至るまでの中華とえびすを詳細に分けたものである。

[9] この冊は、日本の世系・地図・風俗・言語・物産を記録したものである。

[10] この冊は、古今の考據と辨證の言葉を記録したものである。

[11] この冊は、嶠南郵丞になったときの聞見を記録したものである。

[12] この冊は、『礼記』の難しい字と疑心なる意味を解釈したものである。

[13] この冊は、御命を受け、『御定宋史筌』を編纂、校閲する際の遺民の列傳及び高麗・遼・金・蒙古の 傳記を補充したものである。

[14] この冊は、明 末年の遺民傳を編輯ものである。

古を学問しながらそれに陥るのは本当の真古ではない。古を参考にして今を察せるのが本当の真古である。[15]

世俗に外れた士は、何事にも古に従おうとし、世俗に流れた士は、何事にも今を従って互いに激怒して中道を保つにくい。自ら古を参考にし、今を察するいい方法があるに、どうして士君子の中正な学問を損なえるのか。昔は、のそのそ這っていって弔う人もあり、また、聞くには、近来、士として修身して古を好み、笠は東方の風習としてつかえものにならないといって、柳の皮で作った冠をかぶって行き来し、人の笑いものにされたと聞くのに、古に従う弊害も誠に怪異であるが、今に従う弊害はいえたものではない。[16]

青莊館は、古にならい、それを無条件に従うのではなく、古と今の中で、今日、有効に使えるものをわきまえて有益に活用しようとしたのである。これが青莊館の学問する明確な態度である。このような態度は、文学においても同様である。

ある人から“歴代の詩の中で、一番好きな詩は何か”と聞かれて、答えるに“蜜蜂が密を作る時、花を選ばない。もしも蜜蜂が花を選り分けようとすると、密は作れない。詩を作るのも同じ事である。詩をつくる人は、当然いろんな人のものを広く見るべきである。分別して見分けることができれば、その人の詩には、歴代の体制と格調がそれぞれ備えられるだろう。今の人々が唐・宋・元・明をさしてそれぞれ奉ることがあるが、これは、詩をいう不変の論（鉄論）ではない”と言った。[17]

青莊館は、詩をつくる際にも一つの方向に偏らずに広く渉猟し、歴代の詩の体格（体制と格調）を満遍なく備えることを勧めており、そうすることによって自ら詩について分別し、選り分ける眼目が生じてくるという。果たして青莊館が追求する古は何か。

---

15 李德懋、「敎習」、『士小節』3、
學古而泥 非眞古也 酌古斟今 今眞古也

16 <歲精惜譚>、「嬰處雜稿」1、『青莊館全書』第5卷
脫累之士 事事欲遵古 流俗之士 事事欲從今 互相激憤 難得適中 自有酌古量今底好道理
何害士君子中正之學也 古有匍匐 吊表之人 又聞頃世 士修身好古 以笠爲東俗 不堪著 及卷柳皮爲冠
行于道 爲人駭笑 遵古之弊 固已怪也 從今之弊可勝言哉

17 李光葵、<先考府君遺事>、「附錄」、『刊本 雅亭遺稿』 第8卷
或問 歷代詩何者最好 曰蜂之釀蜜 不擇花 蜂若擇花 蜜必不成 爲詩亦猶詩也 爲詩者當汎濫於諸家
有所裁度 則吾詩各具歷代體格 今之人曰唐曰宋曰元曰明 各有所尙 非言詩之鐵論也

我々は、20年前、百家書を博覧し、また、豊富であるといえるが、やがて究極的な志は、まさしく經史を完全に理解することであり、文を書き、自分なりの意見をたてたのは、経済と実用の間を外れないで、自ら漁仲・貴與の斑列につくことである。詞章を作るにも別途に僞体をすて[別裁僞體]、多くの師を師として奉ることを[多師爲師]互いに約束したのである。[18]

上記の文は、1793年、正祖王が朴齊家に文体に対する自訟文を作るように命じたので、青莊館が当時の夫餘の役員であった朴齊家に送った手紙の一部である。即ち青莊館が追い求めた‘古（古のもの）’とは、まさに博覧でありながら、經史を完全にすることであり、現実の関心は、まさに経済と実用にあった。詞章においても華美な風潮の詩を見習わず、風雅を典範とし、多様な体の文章を渉猟し、よい所を取り入れようとした。[19]

上記の文からわかるように、 青莊館の学問の究極的な指向点と文章に対する彼の立場が明確にわかる。特に、この文は、彼の臨終の年に過去を回想しながら言及したという点から、格別な意味をもっているといえる。

そして、次の文では真の文[真文]に対する彼の考えがうかがえる。

古文という名目（名）が盛行したのは、隋.唐以来のことである。大抵、世の中の名の知れた雋傑には、それぞれの志気と精神、言語と事功（功労）があるが、それらを互いに関連づけて筆先で表現するものとして文ではないものはない。たとえ巧みと拙な分別（区別）はあるものの、どうして古と今の分別があるだろうか。科擧の学問ができてからはもっぱら浮虚（根拠なく虚しいこと）を拝め尊び、科文[功令]に拘って主司（科擧の試験官）の目にとめられないかのみを恐がり、文を作り、それをやがて時文と呼んだのである。この他、序・記・論・説など、 文字に少しの典則を加えたのを古文と名付け、人々がこれを見て極めて難しいものと見なした。これによって二つの道（詩文と古文）に分かれ、文章の真のものというのは、ほとんどなくなった。[20]

---

[18] <朴在先 齊家 書>、『刊本 雅亭遺稿』第7卷、文、書
吾儕二十年前 汎覽百家 亦云富有 畢竟歸趣 卽全經全史 而著書立言 不出經濟實用間
竊自付於漁中貴與之列 發爲詞章 亦以別裁僞體 多師爲師 相與約誓

[19] 別裁僞體’と‘多師爲師’の意味についての琴東呟、朝鮮後期 文學理論研究、（寶庫社。2002）pp. 239~240。參照

[20] <耳目口心書> 1、『青莊館全書』第48卷
古文之名目盛行 其隋唐以來乎 夫名世雋傑 各有志氣精神 言語事功 發露筆端 酬應不已者
無非文也 雖有工拙之辨 安有古今之分 科擧之學既出後 專尙浮虛 拘於功令
以不入主司之眼爲可懼 而始号爲時文 其它序記論說等文字稍加典則者 号爲古文
視之爲至難底物 於是分爲二道 文章之眞十亡八九矣

青莊館が考える真の文章とは、科文に拘った時文でもなく、他の序・記・論・説など、文字に多少の典則を加えた（当時の難しく感じられた）古文でもなく、すぐれた雋傑が持っている志気と精神、言語と事功（功労）が互いに関わりあって表現されたものである。

青莊館は、学問をするには、經史を完璧に理解しながら多様の文を読み、その中でよいものをとるという極めて柔軟な態度をとり、このような態度は、文学にも同様であると考えられる。

3 朱子学伝統の継承様相

青莊館は、經史を完璧に理解にすることを究極の目標においたのであるが、具体的に、彼の志向する学問は、まさに朱子の学問である。

> 学術というものが純粋か否かを知ろうと願わば、門路（学問の要諦にいたる道）がどうかを調べなければならず、門路は、じっとしていてはわかることではない。晦菴朱夫子の『小学』『近思録』と栗谷李先生の著である『擊蒙要訣』『聖學輯要』は、勉強する先後が明確であり、条例の大小が整然であり、それを捨てたら、門路の正大なものを得られないのである。私が近代新安地域の儒者である施虹玉氏の『塾講規約』を読んでみると、彼は、朱子の故郷で生まれて朱子の学問を覚えたので、彼の言ったことが通達であり、平坦で、因ってわかりやすくて行いやすい。彼の考えは、『小学』と『近思録』を受け継ぎ、また、『聖學輯要』『擊蒙要訣』に合致して横道にそれたり、早道をしないことが明白であった。今年の冬、趙敬菴[趙衍龜]が学問する方法についての絵と解説を編輯した。私がこの冊により、その条理を解いて糾明したところ、敬菴は、長らく贊嘆して、私にその段階を羅列して絵を描いてくれることを願った。それで、私は、彼（趙敬菴のもの）に組を合わせ、それをつないで9個の絵を描き、敬菴の書籍に載せた。[21]

---

[21] <塾講規約圖跋>、跋、『刊本 雅亭遺稿』第3巻
欲知學術之醇與不醇 只尋門路之如何 門路非徒然而知也 晦菴朱夫子小學書近思錄 栗谷 李先生 擊蒙要訣 聖學輯要工程之先後犂然條例之大小井然舍此則難乎得其門路之正大也
余讀近世新安儒者施虹玉氏塾講規約 生乎朱子之鄉 講乎朱子之學 其爲言也 洞達坦易易知易行 承襲乎小學近思符合乎輯要要訣 其不爲旁門捷路 曉然明白也 今年冬
趙敬菴編次爲學之方圖說 余引此書 紬繹其條理 敬菴贊嘆良久 請余排列爲圖 余於是對待而承接之 作九圖 載於敬菴之書

青莊館は、朱子と栗谷の学問が門路の正大なものであり、その学術は、純粋であると認識していることがうかがえる。なお、燕巖朴趾源も青莊館の行状について言及している。

> 懋官は、早くから儒者であると自称しなかったが、彼の行実を公正に考えると、程朱の門戸を守るのに少しも外れず、文章を作るのに馳騁震耀を求めず、言葉に筋道が通って理致に合って、絵を刻むような簡潔さで自ら一家をなした。[22]

朴趾源は、青莊館の行実と文章を評し、行実は、程子と朱子に少しも外れておらず、文章は、言葉に筋道が通って理致に合いながらも簡潔であるといった。この文は、長い年月を交遊した燕巖が青莊館の一生を振り返って回顧した文であるという点で大きな意味があると思われる。

以上の論から見ると、青莊館の学問とその実践としての行実そして文章において、基本的に程子と朱子に従ったことがわかる。

このような点に加えて一つ注目することは、青莊館は、栗谷を高く評価している点である。上記の門路の正大さを得られるものとして朱子の『小学』、『近思録』と並んで栗谷の書いた『聖學輯要』と『擊蒙要訣』を上げている。このようなことは、理学の側面から見ると、栗谷を朱子と同じ斑列にもちあげておいたことを意味している。さらに上の書を後四書と呼び、高く評価し、讃えている。

> 『大学』『論語』『孟子』『中庸』の四書は、学問をする段階が紛らわしくなく。これを受け継ぐものとして『擊蒙要訣』『小學』『近思録』『聖學輯要』はその規模が精密であり、浅い所から深い所へと入るのである。私はかつてからこれをさして後四書といった。繰り返して馴染んでいけば自然に功效が得られるものであり、毎度、同僚に学習の規範にすることを勧めた。[23]

青莊館は、栗谷の『聖學輯要』と『擊蒙要訣』を必ず学習すべきものとして高く評価し、特にその中でも『聖學輯要』を重要視している。

---

[22] 朴趾源、<行状>、「付録」、『刊本 雅亭遺稿』第8卷
懋官未嘗以儒者自命 夷考其行 謹守程朱門戸 不失尺寸 爲文章 不求馳騁震耀 辭達理到 刻畵簡潔 自成一家

[23] <敎習>1、士小節 第3 、士典3、『青莊館全書』第27卷～第29卷
學語孟庸 爲學階梯 井井不紊 繼此者 擊蒙要訣小學書近思錄聖學輯要 規模精密 由淺入深 予嘗名之曰 後四書 循環貫串 自見功效 毎勸同人以爲學規

私は、かつて朝鮮で、いちばん優れた三冊の本があると思っているが、いわゆる『聖學輯要』『磻溪隨錄』『東醫寶鑑』のことで、一つは道学、一つは経済、一つは人を助ける方術で、すべて儒者のなすべきことである。[24]

朝鮮において道学に関する著述として『聖學輯要』を最も優れたものとして評価したのである。

清の潘庭筠に送る手紙には、中国で、栗谷の『聖學輯要』を刊行して頒布することを強く勧めた。

我々東方の栗谷先生李文成公（李珥）は、資品は、顔子と曾子の如く、義理においても程子と朱子に等しい。よく思うに、先生は、すでに湛軒（洪大容）から聞いておられると思います。この方は、東方の聖人として、その学問は、中国に表彰されていないのは、誠に缺典であり、人にとって慨歎することであります。かつて湛軒が年の初めに、先生に栗谷の著した『聖學輯要』をさし上げたのに、どうして先生は世に広く頒布して儒学を輝かせなかったのでしょうか。[25]

上の引用文からも確認できるように、青莊館は、栗谷の義理を程子と朱子にくらべており、‘東方の聖人’として奉っている。このような言及を通じて青莊館の学問的脈絡をうかがうことができる。

青莊館は、『寒竹堂涉筆下』で、本菴 金鍾厚の〈氵藍溪廟庭碑〉[26]を紹介しているが、金鍾厚は、この碑文で、朝鮮の理学の系統を彼なりに明らかにしている。

そびえ立つ斯道の為に地に落ちた儒学の手がかりを中国から受け継いだ人は、誠に寒暄（金宏弼）金先生と一蠹 鄭先生（鄭汝昌）からで、これを受け継いで靜庵（趙光祖）・退溪（李滉）・栗谷（李珥）・牛溪（成渾）・沙溪（金長生）・尤庵（宋時烈）・同春（宋浚吉）などの諸先生によって代代に奮起し、今に至るまで大きく輝かせ、天下の道統が我が国に伝えられたことで、とてもすばらしいことである。[27]

---

[24] <與李洛瑞書>、『刊本 雅亭遺稿』第6卷、文、書
不佞嘗以爲朝鮮有三部好書曰 聖學輯要 曰磻溪隨錄 曰東醫寶鑑 一則道學 一則經濟 一則活人之方 皆儒者事也

[25] <潘秋 庭筠>『雅亭遺稿』11、書5、青莊館全書 第19卷
我東栗谷先生李文成公珥 資品顔曾 義理程朱 竊想先生已於湛軒熟聞之 此是東方聖人 而其學不表章於中國 誠爲缺典 令人慨歎 嘗湛軒年前仰餽先生栗谷所著聖學輯要 先生何不開彫廣布 以光儒學耶

[26] 氵藍溪書院は、文獻公 鄭一蠹（鄭汝昌） 先生を享祀する所で、廟庭碑は、奉祀孫 德濟が建てて、碑文は、本菴（金鍾厚）が作った。

[27] <氵藍溪廟庭碑>、『寒竹堂涉筆』下、青莊館全書 第69卷

また、青莊館は、他の文で理学をする人々の詩を紹介しているが、偶然、諸先生の絶句の中で、読誦するものを思い出した。鄭一蠹（鄭汝昌） 先生の〈遊頭流山〉詩に、

風がそよそよと蒲を軽やかにそよがせ[28]、
四月、花開には麥がすでに実っている[29]。
頭流山の数多くの峯々を眺め
一人舟に乗り大河を流れ下る
風瀟獵獵弄輕柔　四月花開麥已秋
看盡頭流千萬疊　孤舟又下大江流

と詠い、李栗谷先生が金沙寺で書いた詩に、

松の間を吹き抜ける昼の風が涼しく
手でもて遊んでいた砂釜に夕陽が射して
千年阿郎の跡形を尋ねる所もなく
蜃気楼が消え去った海が何と広いことか
松間引歩牛風涼　手弄金沙到夕陽
千載阿郎無處覓　蜃樓消盡海天長

と詠い、 成牛溪（成渾）先生の<溪上春日>という詩に、

五十年間青い山に臥して
是と非は多く世上に何をなそうと表われるのか
小さな家に春風が限り無く吹き
咲いた花、眠っている柳、なんとのんびりしていることか
五十年來臥碧山　是非何事到人間
小堂無限春風地　花笑柳眠閒又閒

と詠い、宋尤菴（宋時烈） 先生の〈道峯書院〉という詩に、

其卓然爲斯道 倡接墜緒於中土者 實自寒暄金先生 一蠹鄭先生
始沿是而有靜菴退溪栗谷牛溪沙溪牛菴同春 諸先生代作 至于今 磊落煇赫 而天下道統之傳歸于我矣 猗歟威哉

28 （原註）案 侯鯖録 宋詩僧參寥詩 風滿獵獵弄輕柔 欲立蜻蜓不自由（『侯鯖録』）を詳考するに、宋の詩僧 參寥の詩に ‘風がそよそよと蒲を軽やかにそよがせ[風滿獵獵弄輕柔] 赤トンボが思うように止まれない[欲立蜻蜓不自由]' と詠んだ。』

29 （原註） 案 花開州名（詳考するに花開は、郡の名前である。）

青い絶壁の切り立ったような所に洞口が開いていて
谷川の水がちょろちょろと流れ、何度も曲がりくねり
堯舜時代の君と民、現代の意志であるにもかかわらず
廟堂の門前はがらんとして後の世の人が来るばかり
蒼崖削立洞門開　澗水潺湲幾曲回
堯舜君民當世志　廟前空有後人來

と詠い、金農巖（金昌協）　先生の〈江行〉という詩に、

葦の生い茂った丘に草露が輝き満ちて
あばら屋に秋風が夜半吹きつけて
舟上に寝ころんで澄んだ川を三十里さかのぼると
月は明るく、やわらかく櫓を漕ぐ音が夢うつつのようだ
蒹葭岸岸露華盈　篷屋秋風一夜生
臥遡清江三十里　月明柔櫓夢中聲

と詠い、李陶菴（李縡）　先生の <春興>という詩に、

庭の花はひっそりと咲き鶯が一羽来て鳴き
草原の水がざぶざぶと一つがいの白鷺明らかに
杖をつき小川の西をぶらつくといつのまにか春の日も暮れかかる
村々に桑畑の向こうにのぼる夕餉の煙を見る
園花寂寂一鶯鳴　野水翻翻雙鷺明
扶杖溪西春日夕　數村桑柘看煙生

と詠った。その他にも理学をする先生の詩の中には、読誦できるものが多いが、まだ詳考できなかった。[30]

青莊館は、理学をする人たちの詩を紹介しながら、鄭一蠹（鄭汝昌）、李栗谷（李珥）、成牛溪（成渾）、宋尤菴（宋時烈）、金農巖（金昌協）、李陶菴（李

[30] <理學諸先生詩>、「清脾錄」4、『青莊館全書』第35卷
偶思諸先生絶句可誦者　鄭一蠹先生　遊頭流山　風瀟獵獵弄輕柔　四月花開麥已秋
看盡頭流千萬疊　孤舟又下大江流　李栗谷先生題金沙寺　松間引步牛風涼　手弄金沙到夕陽
千載阿郎無處覓　蜃樓消盡海天長　成牛溪先生　溪上春日　五十年來臥碧山　是非何事到人間
小堂無限春風地　花笑柳眠閒又閒　宋尤菴先生　道峯書院　蒼崖削立洞門開　澗水潺湲幾曲回
堯舜君民當世志　廟門空有後人來　金農巖先生　江行　蒹葭岸岸露華盈　篷屋秋風一夜生
臥遡清江三十里　月明柔櫓夢中聲　李陶菴先生　春興　園花寂寂一鶯鳴　野水翻翻雙鷺明
扶杖溪西春日夕　數村桑柘看煙生　此外理學諸先生詩　亦多可誦　偶未之考爾

縡）について述べている。彼らは、皆、士林として、道学をして詞章を排斥した人であり、それで、彼らは、性情を詠い、詩をつくる人である。彼らの詩は、すべて温柔敦厚（または優柔忠厚）を基盤にしている。

青莊館は、文末で“この他にも理学をする先生の詩の中には読誦すべきものが多いが、まだ、詳考できなかった。”と述べていたが、それでも、青莊館が彼らの詩をまず選別して先に読み、整理したことは、それなりのある意味があると思われる。

鄭一蠹（1450～1504）は、戊午士禍、 甲子士禍の時、なくなったが、中宗朝の時、鄭夢周（1337～1392）・金宏弼（1454～1504）と共に東国道学の宗として推仰され、彼の師である金宗直（1431～1492）の学風を受け継いで‘実践’を主としてながら詞章にかたよらない道学に専念[31]した。

栗谷（1536～1584）は、学問的に特別に師承した人はなく、独自的に学問を成し遂げた人である。特に栗谷は、朱子を欽慕し、道学に造詣の深い人で、理論的にも体系がたち、整然たる論理を持っているだけではなく、特にその‘実践’を強調した。栗谷は、‘真知’を強調したのであるが、これは、‘事物の理を窮究して実践を通じて完成された知’をさしている。

> 人が見るには、三つの層がある。聖賢の文を読んでその名目のみをさとる（暁）者があるが、これは一つの層であり、すでに聖賢の文を読んでその名目をさとり、また、心沈めて深く考え、精密に調べ、その名目の理致をさとり、心目の中においてその聖賢の言葉が果たして私をだましてないことをさとる者があるが、これももう一つの層である。ただ、この一つの層には、多くの層数があるが、その一端をさとる者もあり、その全体をさとる者もあるが、その全体の暁の中にもまた浅さと深さがある。要するに、口で読み、目で見る群ではなく、心からさとることがあるから一つの層に扱う。すでに、名目の理致をさとって心目の中にあって、また真に実践して努めて行い、その知識を満たし、その至極に及んでは、すぐ自らその境界を踏んでみて、自らそのことを近くし、目のみに見るものではない。このようにしてから、まさに ‘真知’といえるのである。もっともの下の層は、他人の言葉を聞き、それを追っていく者で、他の層は、眺める者であり、上の層はその土を踏んで直接みる者です。[32]

---

[31] 崔英成、<鄭汝昌>、「士林派 學者의 成長」、『韓國儒學思想史 Ⅱ』（亞細亞文化社、1995）、p. 127参照

[32] 李珥、「答成浩原」壬申6、『栗谷全書』卷10、書2
人之所見有三層 有讀聖賢之書 曉其名目者 是一層也 有既讀聖賢之書 曉其名目
而又能潛思精察 豁然有悟其名目之理 瞭然在心目之間 知其聖賢之言 果不我欺者
是又一層也 但此一層 煞有層級 有悟其一端者 有悟其全體者 全體之中 其悟亦有淺深
要非口讀目覽之比 而心有所悟 故俱歸一層也 有既悟名目之理 瞭然在心目之間
而又能眞踐力行 實其所知 及其至也 則親履其境 身親其事 不徒目見而已也 如此然後
方可謂之眞知也 最下一層 聞人言而從之者也 中一層 望見者也 上一層 履其地而

栗谷も鄭一蠹と同じく、道学においてその実践を重要に考えた。成牛溪（1535～1598）は、栗谷と道学に関する問答形式の手紙を通して、学問の意味を同じくした人であり、宋尤菴（1607～1689）、 金農巖（1651～1708）、李陶菴（1680～1746）は、皆、栗谷の門下の人で、栗谷とその志向する所は同じである。

だから、青荘館が理学する人の中で、特にかれらを選別した理由は、彼らが道学をしながら ‘実践’を重視したことと、自身の‘実用’を重視する考えと同じだったからではなかろうかと思われる。

> 道というのは、日常生活の目の前にあって、極めて浅くて近い。灑掃・応対するより浅いものはなく、愛親・敬長することより近いものはないのに、偉人になろうとする者は、ほとんどこれをすてていき、高くて大きいことを窺い、必ず、まず天道を語り、易理を論じようとするに、等級をのりこえて、順序に従わないことはこの様である。人事のことを知らずどうやって天事のことを知り、人理を知らずどうやって易理を知るものか。[33]

青荘館は、日常生活で最も基本的な灑掃と応対、そして親愛と敬長を実践せずに口先で天道と易理を論ずる人々の段階を踏んで進まない虚構を叱責し、人事と人理の ‘実践’を強調している。
青荘館のこのような論は、やはり栗谷の次の言及と関わっている。

> 大体、道は、高くて遠いから行いにくいことでなく、ただ日常生活[日用]の中にあるのみで、日常生活の中で、必ず行わなければならぬこととして、道ではないものはない。[34]

この文は、栗谷が成浩原に送る手紙の一節である。栗谷は、道とは、日常生活の中で必ず行わなければならないことであると語っている。‘浅いところから深いところへ、近いところから遠いところへ’[35]、その段階を踏んで進めていくことを

親見者也

[33] <歳精惜譚>、「嬰處雑稿」1、『青荘館全書』第5巻
道在日用目前 甚淺近 莫淺於灑掃應對 莫近於愛親敬長 欲做好人者 多舍此去 而窺高大 必先欲談天說易 其躐等而不循序 如此 未知人事 安知天事 未知人理 安知易理

[34] 李珥、<答成浩原渾> 甲寅、『栗谷全書』巻9 書1
大凡道非高遠難行之事 只在日用耳 日用之所當行者 無非道也

[35] 栗谷は、これと関連して彼の著書の中で、朱子の言葉を引用しているが、栗谷もこのような話をよくした。
人之所以爲學者、 以吾之心未若聖人之心故也。 心未能若聖人之心、 是以、 燭理未明、無所準則、 隨其所好、 高者過、 卑者不及、 而不自知其爲過且不及也。 必因先達之言、 以求聖人之意、 因聖人之意、 以達天地之理、 求之自淺以及深、 至之自近以及遠、 循循有序、 而不可以欲速迫切之心求也。（人が学問を為す所以は、吾が心が聖人の心に至らないからである。心が聖人の心に至らないから理致（理）を明らかにするこ

表している。さらに、青莊館は、当時の道学を度外視して詞章を重視する当時の一般的な文風を批判している。

> 浮華な群らが經書と他の学問の言を見たがらず、特に面白さを知るのは稗説にも及ばない。たとえ（經書を）読む者がいてもあえて剽窃して詞章に傅会させるのに、これは、真の読みではなく、經書を有意に読む者があれば、むしろ腐った学者であると欺くことに対し、私は甚だ遺憾である。[36]

彼は、詞章の中に特に、科擧の文章を批判している。

> ああ！世の中の人々は、ほとんど科擧以外の楽しいことがあるのを知らず。その故、父兄と師友がこれ（道学）を努めて勧めると、喪心し、身を失わない者は一人もない。 古を習う理由は、知識と見聞を広げるためであり、書を読む理由は、倫綱をたてるためであり、このことがいかにいいことではなかろうか。たとえ、国家の制度に従って科業を習うことを逃れなくても、すべからく卓然に自立して今世の科儒が軽浮で、陳腐な陋習を快く逸脱してからは、よく本然の天真を保存することができることであり、そうではない場合には、すべて雑流であろう。そなた（稼雲）は、心が静かで、体が端正であるに、当然、この言葉を迂闊であると思わないだろう。[37]

青莊館は、科文が軽浮で、陳腐な陋習を脱せれば、‘本然의 天真’が得られると考えている。この ‘本然의 天真’は、青莊館詩論の一つの要諦である。では、この‘天真’とは一体、何なのか。

とに能わず、準則になるものがなく、それぞれの心ゆくままに高者は、正道を過ぎて、卑者は、それに及ばないにも　各自、自らは、過ぎること、及ばないことを知らない。必ず先人の言によって聖人の意を求め、聖人の意によって天地の理に達すべし。求めるには浅いところから深いところへ及び、 至る所は近い所から遠い所に及び、循循の序があり、順序があるべく、急いで切迫な心で求めてはいかぬ。<修己> 第2上、「聖學輯要」2、『栗谷全書』卷26

[36] <歳精惜譚>、「嬰處雜稿」1、『青莊館全書』第5卷
浮華之流 厭看經書及其它學問等語 別知滋味 不如稗官 雖有讀者 務爲剽竊 傅會詞章 非眞讀也 或有意讀之 即反嘲曰 腐儒 余於斯有感

[37] <徐稼雲有秊>、「雅亭遺稿」11、書5、『青莊館全書』第19卷
嗟乎 世之人 擧不知科擧外有好事 故父兄師友 以是勸勉 其不至喪心失身者 幾希矣 學古所以長知見 讀書所以扶倫綱 茲豈非好事耶 雖未免從國制習科業 而須卓然自立 快脫今世科儒輕浮腐陳之陋習 然後 能保本然之天眞 不然 則皆雜流也 稼雲心靜而體端 應不以此言爲迂也

大抵、嬰兒が楽しく遊ぶのは、天であり、處女が恥ずかしながら隠すのは、真である。これがどうして無理矢理努めて出来ることであろうか。楽しむことの至極は、嬰兒にまさるものはないのに、彼らの遊ぶ姿は、藹然なる天であり、恥ずかしがることの至極は、處女にまさるものはなくて彼女が隠すのは、純粋なる真である。 人間として文章を楽しむことにおいて至極に楽しみ、至極に恥ずかしがって隠す者として、また、私と同類の者はない。だから、その稿を嬰妻と称したのである。[38]

青莊館が語る天真は、即ち、‘飾り気のない心’なのである。

昔、私は君の詩をそらんじていた
千年に一人の聖人だと思っていた
しばしば夢の中に出てくるのは
まるで世俗を超えたと見えたが
今、忽然と見えるようになった
手を握り天真爛漫さをあらわにする
こぼれ落ちた竹林のおもしろみで
互いに見合えばかぶりものは何もない
君は横目でにらまず
私はしかめっ面をしない
どうか各自、頑張って
気ままに生きて貧しさを忘れよう[39]
昔我誦君詩　意謂千載人
往往夢中覯　有如超俗塵
伊今忽見之　握手露天眞
灑落竹林趣　相看不冠巾
君目不爲白　我眉不爲嚬
願言各勗心　逍遙以忘貧

青莊館にとって天真とは、‘飾り気のない心’であり、具体的には、‘世俗を脱する灑落’の意味でもある。この天真をみる立場もやはり栗谷と同様である。

[38] <嬰處稿自序>、「嬰處文稿」1 序、『青莊館全書』第3卷
夫嬰兒之娛弄 藹然天也 處女之羞藏 純然眞也 玆豈勉强而爲之哉……娛之至者 莫如乎嬰兒 故其弄也 藹然天也 羞之至者 莫如乎處女 故其藏也 純然眞也 人之嗜文章 至娛弄至羞藏者 亦莫如乎余 故其稿曰嬰與妻

[39] <酬東方子金錫汝洪運>、「嬰妻詩稿」2、『青莊館全書』第2卷

……
正しく公正な徳性は太陽や月のように光って明るく
それは天が賦与したものなのだ
妄想が本来の明るさをむしばんでしまう
始めは微かだが、やがて激しさにとってかわる
まるで樹木が斧や手斧に苦しむように
天真爛漫が私慾と嘘に溺れ
二十五年の間
心の迷いに沈んで酔ったようになる
昨日の過ちを想い出して見る時
恐ろしい位、驚かされる。[40]
……
明德皎日月　斯皇天所畀
妄念蝕本明　始微終轉熾
山木困斧斤　天眞汨私僞
二十五年間　沈迷夢中醉
追思昨者非　令人發驚悸

栗谷の詩を參照すると、天真は、私慾と偽りを除いた日と月のような明るい明德を意味していると思われる。即ち青莊館が考えている天真は、これにまさしく同じであることがわかる。

しかし、日常生活での天真が窮極的に志向するものは、まさに樸素である。

大抵、事物として工巧さに近いものは、偽りになるから、真に反対であり、また、守真という人は、かつてから古を好んだので、古を好む人は、必ず樸素たるものをとるのであろう。専ら樸素たるものは、今を好むのでなく、なお、巧詐と相反するものである。 古を好んで樸素たるものをとる者は、真をすてて何を守るだろうか。こんな理由で、私がこの文を読み、守真という人の守真たるものを知る所以である。[41]

青莊館は、真は、巧の反対であり、樸素と巧詐と反対であるとし、真と樸素を等価として見ている。即ちこのことからも天真を樸素として見なすことが出来る。

---

40 李珥、<至夜書懷>、『栗谷全書』卷1 詩上

41 <守眞軒記>、「記」、『青莊館全書』第3卷
夫事物之近乎巧者 流以爲詐者 眞之反也 且守眞者 生於斯世 志嘗好古焉 好於古者
必取樸與素 維樸素 非今之所好 而亦巧與詐之相反者也 其好古而取樸素者
捨乎眞而安所守歟 此余所以讀其文而知之乎守眞者之爲守眞也

文（詩）において樸素[天真]を追求すべきものであるという青莊館の論もやはり栗谷の詩觀と関わっている。

栗谷は、38歳の時（1573）、詩選集である『精言妙選』を著したが、この書は、栗谷の 詩理論として詩の根源を明らかにし、その根源から生まれてくる詩を八つの品格に分けられた書冊である。栗谷は、冲淡を詩の源流としてみており、冲淡なる詩から淡泊さを味わうことが出来ると見た。そこで淡泊さとは、“省察を通した真’の獲得”と‘不変性の追求’によって到達できる境地であるが、この時の‘真’は、即ち‘醇朴’である[42]。この ‘醇朴’というのは、青莊館の言う‘樸素’と 同一概念である。詩の志向すべき境地として、栗谷は、‘醇朴’を、青莊館は‘樸素’をかかげたのである。

以上の論からみると、青莊館は、思想と文学において基本的に道学、特に朱子学に根本をおいてあり、特に我が国の栗谷を‘東方の 聖人’として高く推仰して、思想と文学の面で、青莊館は栗谷を私淑したものと見なされる。

4 公安派理論の受容様相

青莊館は、20代の初め、すでに公安派の一員である袁中郎の文を読んでいた。青莊館だけでなく、多くの人が彼の文を読み、その体を手本として詩を作ったりした。次の文は、このような事情をよく示している。

春の日、子欽（邊日休）と会った時、子欽は、自分の連句を詠った。

黄色い芽と青い莢が子供のように動き回わり
ちりめん模様のような水面に、もやが絹織物のように美しい
水は暖かく鴨の雛が水の泡に遊ぶ
寺はがらんと人影もなく牝狐が仏像の前にぬかずく
黄芽緑莢如孩動　縐水紋嵐似縠纖
水暖鳧雛泡影嬲　寺空狐女佛光參

私が言うに、“本来、袁中郎であろう。近来、聞くには、稚川が中郎集を見ているそうだ。”と言った。よって子欽と何篇を作ったが、格が一層進歩したそうにみえた。

春はすべてをあらわにするのを嫌い先ず柳の木に入り込む
雲は頼るところがないのを嘆き、ついに杉の木と過ごす
春嫌全露先侵柳　雲悵無依竟度杉

[42] 筆者의「時調의 創作技法 研究」、『韓國思想과 文化』 第20輯（韓國思想文化學會、2003） 參照。

と詠んだ詩があるが、子欽は、存神の変化がなくはなかった。子欽が笑いながら、“中郎書院を作って私を配享すべきか。一つの中郎は、たとえあり得ることはあるが、近来、百中郎をあっちこっち作るのは、あまり度外れではなかろうか。”と言った。[43]

邊子欽の詩を見て、直ちにそれが袁中郎の体であることを見抜いた青莊館をみると、すでに青莊館は、袁中郎の文に馴染んでいたという事実がわかる。また、“近來、百中郎を作るのは、度外れではないか”という邊子欽の言及から当時の知識人の間で、袁中郎の文が広く読まれていて、その体をまねることが多かったことがうかがえる。

しかし、一方、袁中郎の文に対する批判的な知識人もいた。

> 文章には、悟る所があってから初めて、その立場に立つことができるので、中郎を末世の怪品であると欺かないで、心を備え、静かに考えを集中させれば、必ず明るくて玲瓏な所を得て一度、目を動かせば、即ち、万物がすべて私の文章になる。
> そなたの才能は、古質である故に、このような方法で、私がそなたを救援する。しかし、どうしてひたすらこのようなことに陥り、放蕩にながれ、戻ってくるのを忘れるのか。毎様、このような群れは、客賓[賓]の礼でもって迎えるべきで、我が家に深く立ち入らせてむしろ主人として仕えてはいけない。融通性のない固執は、文を作ることにおいて避けることである。専ら、そなたは、それ生かせる方道（方法）を考えなさい。私もなお、もう一才、年をとったのであるが、昔のように愚かなのに、どうすればよかろうか。[44]

青莊館が内弟の朴宗山（朴稚川）に中郎（袁宏道）の文を読んでみることを勧めた文であるが、朴宗山に袁中郎の文を末世の怪品として考えないようにと勧誘している。このような事実からみて、当時、袁中郎の文を無視する部類もあったことがわかる。さらに袁中郎流の文を主人として仕えないで、客の礼として迎えなさい

---

[43] 「耳目口心書」5、『莊館全書』第52卷
春日逢子欽 子欽誦其數聯曰 黃芽綠莢如孩動 縐水紋嵐似穀纖 水暖鳧雛泡影嬲 寺空狐女佛光參 余曰 故是袁中郎 近聞稚川觀中郎集 仍與子欽作數篇頊進一格 有曰 春嫌全露先侵柳 雲恨無依竟度杉 子欽不無存神之化也 子欽笑曰立中郎書院 以吾爲配享也 一中郎雖不可無 近者散作百中郎 無乃太濫耶。

[44] <内弟朴稚川宗山>、「雅亭遺稿」8書 2、『青莊館全書』第16卷
文章有悟處 然後立脚 勿以中郎爲末季怪品侮之 齊心靜會 必透得領玲瓏竇 一轉眼 則萬物皆吾文章也 君才古質 故以此救之 然豈一切於是物 流宕忘返也乎哉 每當以此輩禮待之 不可奥入我室 反以主人事之也 守株膠柱 爲文之大忌 惟君思所以轉活之 余又暾一年 猶舊痴奈何

という青荘館の言及を念頭にいれると、 青荘館もやはり文章に対する袁中郎の考えを必ずしも心においていないことがわかる。

袁中郎の公安派に対する青荘館の考えは、次の文によく表れている。

或者が言うには、

“もし、袁柳浪がいて左便（左側）に徐文長（徐渭）を、右便（右側）に江進乏を連れて、また、曾退如・陶周望の群れを連れて来て、そなたに聞くに、‘文章にどうして一定の法があるのか。理致が何で必ず先民が教えるものであり、何で必ず前賢がいつも語ったものでなければならないのか。当然、縛られているものをきっぱりと脱ぎ捨てて直ちに勢いよく進めば、門戸は、しっかりとそびえ立ち、 洞天は、直ちに他に開かれる。もし古の人の字句を掻き集めては、どうして世に名を上げた名高い文章といえるのか。’としたら、そなたはどう答えるのか。”と言った。

私は、当然のことながら“そのことは拘束である。もし、そなたの才能なら可能であろう。また、 天下の士の中で、そなたの才能と同じく、超脱にたけている者を選び、この方法で伝えれば、また、それも可能であるが、天下の才能が超脱のみとどまるのでなく、典雅な者もあり、平易な者もある。ところが、一様に皆、新奇を特別に創出するよう求められたら、むしろその本然を失い、高曠で、超絶な地域を追いかけて、なお道を崩すことにならないか、心配だ！多くの士を振作させて、文章が何で一つの規律のみであろうか。即ち、局限はないものであろうか。よって才能の奇異でありながら正しいもの[奇正]は、おのずから見るべきものがあるが、抑揚、與奪、正規、暗諷、順道、反説等、その変化には限りがない。ただ、それにしてその本然と天真を大きく外れながらも、それに染み込んだ屑や腐って汚いものをなくすのみである。また、昔の人の法度[軌轍]に拘束されることも望ましくなく、すべてを捨てることも望ましくない。自ら神妙に解かして明らかにさせて[妙解]、明らかに悟る[透悟] 法があるが、各自、如何にしてそれをとるべきか、それによるのみである。そなたが怒鳴り叱って、天下の人々が皆、私の名に従わないことを大きな気がかりにしたら、直ちに私は、その末に文が道を害して、誣告の言葉と妄靈の言葉で、気がふれて自ら放恣するようになり、許されない罪に陥るかを懸念するに、尚悲しいことである。しかし、天地の間には、ないものはなく、そなたが新しい言葉[新語]をよく作り出すこともまた、ないことはない。幸い、私がそなたの文集を読んで、依託して奇異な見物[奇觀]をした。”

と答えた。[45]

[45] 「耳目口心書」1、『青荘館全書』第48巻

青莊館は、上の文で袁中郎の文章論に対する長、短所を詳細に述べながらその中で、取捨選択することを条理よく説明している。

まず、袁中郎の主張は、即ち“文章には、一定な法はない。だから先民と前賢の理致と言葉に縛られることなく、それをさっぱりとなげ出すべきである。即ち古の人の字句を掻き集める習慣を捨ててしまえ。”と言ったのである。

このような主張に対する青莊館の答えは、“そのことは‘拘束’である。”という否定的なものである。その理由は、次の通りである。

即ち“天下の才能には、 超脱したもの、典雅なもの、平易なものなど、様々であるが、もっぱら一律的に‘新奇’だけを創出するよう要求することになると、むしろその本然を失い、高曠で、超絶な地域を追っかけることになり、道を崩すことになり得る”ということである。ここから儒学の道（具体的に、本然と天真）に対する青莊館の意志を再度、確認することができる。

袁中郎の主張に対する青莊館の対応は、“また、昔の人の法度[軌轍]に拘束されることは望ましくなく、尚、専らすべてを捨てることも望ましくない”ということである。ここでも私達は、青莊館の‘酌古斟今（酌古量今）’の態度が確認できる。では、青莊館が袁中郎に取ったのは、何なのか。 それは、即ち、‘奇’である。彼は、道学に太い根を置きながら、この‘奇’を取り、彼の文学に変容させた。だから青莊館にとってのこの‘奇’というのは、袁中郎の‘奇’に等しくない。袁中郎は、ひたすら‘新奇’のみを追従したが、青莊館は、この‘奇’の中から正しいものだけを取ったことであり、彼の‘奇’は、彼の色んな文学的特徴の一つとしていちづけることである。

青莊館は、‘奇’の正しいもの中に見るべきものとして‘抑揚、與奪、正規、暗諷、順道、 反説、等を提示しながら、それ[奇正]は、絶えなく変化していくものであるといった。そしで、この ‘奇’は、道学の‘本然と天真’を大きく害しないで、ただ、そこに染み込んだ屑や腐って汚いものをなくすのに使うのみである。この‘奇’が正しくなければ、‘やがては文が道を害して、誣告の言葉と妄靈の言葉で、気がふれたかのように自ら放恣するようになり、許されない罪に陥る’ことになるのである。この‘奇’の正しいものを得る方法に対して、“自ら神妙に解かして明らかにさせて

或曰 又若有袁柳浪左擁徐文長 右携江進之 駈曾退如陶周望輩 來問於子曰
文章安有定法哉 理何必先民所恒訓 語何必前賢所恒道 當快脱粘縛 直叚步武 門戶則特立
而洞天則別開也 或掇拾古人字句 豈曰 文章名世哉 子當何答 我當曰 拘也
若以子之才則可 且擇天下之士如子之才 而善於超脱者 傳之以此方亦可 然天下之才 非超
脱而止也 有典雅者 有平易者 壹皆責之 以別創新奇
或恐反喪其本然而日趨于高曠超絶之域 不亦敗道乎 振作多士之文章 豈一律而已哉
無乃局乎 仍才奇正 自有可觀 抑揚與奪 正規暗諷 順導反說 其變化也無涯
但不使之太剝削其渠之本然與天眞 去其滲滓腐穢而已矣 且古人軌轍 不可拘束
亦不可專然抛棄也 自有妙解透悟法 在人人各自善得之如何耳 子紛紛怒罵
以天下人之不一齊從吾命 爲大憂也 則吾懼其末流仍文害道 誣言妄談 猖狂自恣
至陷於不可赦之罪 不亦悲乎 然天地間 無所不有 子之善創新語 亦不可無也 吾幸讀子集
而託以爲奇觀

[沙解]、明らかに悟る[透悟] 法があるが、各自、如何にしてそれをとるべきかのみである。”としながら、自ら悟ることを勧めている。

青莊館の‘奇’に対するこのような考えは、‘奇’と‘平’の調和として現れるが、次の文で、これを確認することができる。

> 私は、趣を主として神靈なこととしたのであり、進玉は、気を主としてすでに変幻なものであります。私は、平易さをひたすら求めたくないが、奇異さをひたすら求めたくない。だから4割は、平易にし、6割は、奇異にして、時には、平坦な道を行き、時には、深い山に入ったりします。ところで、進玉は、発憤して杏嗇の根を取り除いて、苦悶しながら世俗のほこりを洗い流し、衡霍山と峨眉山を蟻の巣や弾丸のように小さく思い、激を直してあげればあげるほど、さらに奇異さを求めて止まることもなく、遠い所へ行ったり、深い所へ至らない所がないことに、その心がまた、悲しいです。[46]

青莊館は、李進玉（李璡）の度を超した‘新奇’ 追求を批判しながら平易さのみを追求しないで、なおかつ奇異さだけも追求しないで、平易さと奇異さを適切に使って自身の立場を明らかにした。即ち平易さと奇異さの調和といえる。

5 結論

今までの青莊館文学の学問的基盤とこのような学問的土台の上で、公安派の理論を受容して自己化する姿、その過程においての態度を見てみた。青莊館は、明らかに、儒学の道、特に、朱子学に 基盤をおきながら栗谷を私淑して、それを自分の学問の土台にした。青莊館は、‘酌古斟今’の態度でもって学問と文学をしたので、朱子学を批判的に継承したものと思われる。本稿では、彼の学問と文学観が朱子と栗谷の影響を受けたことを明らかにすることに主眼点をおいた。

青莊館は、經史を完全にすることを窮極的な目標とし、一生、程朱の門戸を守ろうと努めたが、特に我が国の栗谷を‘東方の 聖人’と高く評価した。さらに栗谷門下の理学をする人々をとりあげて述べたのは、自身の学問的系統を暗黙的に明らかにしたものと考えられる。

青莊館は、学問と文学に対する立場において栗谷ととても類似した点が多い。

---

[46] <尹曾若可基>、「雅亭遺稿」8、書2、『青莊館全書』第16卷
某主趣而欲靈 進玉主氣而已幻 某全平不欲也 全奇不能也 故四分平六分奇 時行坦途 時入深山 進玉憤而拔鄙吝萌 悶而滌塵垢囊以衡霍峨眉 爲蟻封彈丸 愈矯激而愈探奇之不已 懸度鑿通 無所不至 其心亦悲矣

一つ、道学の実践を強調した。栗谷は、真知を主張し、青莊館は、実用を主張した。真知ﾆ ‘事物の理致を窮究して実践を通して知を完成’することであり、実用は、人事、人理を天事、天理に優先するものである。真知と実用は、実際的な体験を重視したという点で同じである。

二つ、天真を追求した。栗谷は、醇朴を追求し、青莊館は、樸素を目指した。醇朴と樸素は、同じ概念である。

この、論文で、論じられなかったが、次のような共通点が更にあった。

まず、広く、学識を備えることを強調した。栗谷は、博文約礼を主張し、青莊館は、博覽を強調したのであるが、二人は、これを生活の中で実践して見せた。

二つ、多様な詩体を遍く取り揃えることを勧めた。栗谷は、彼の詩選集『精言妙選』で片手間に本を見て‘衆体’を備えたと言ったが、青莊館は、ある一国の詩体に偏らないで、時代を超越した多様な体を備えることを勧めた。

三つ、道学を重視しながら文章の価値を認めた。栗谷は、当時の‘載道之文’を強調する時代の雰囲気で、‘文以形道’（『聖學輯要』）を主張したのであるが、青莊館は、‘文章自娛 道學自衛’を 主張した。

青莊館は、公安派の理論に関心を見せていたが、その理論を全的に受容しないで、彼らの主要関心事である‘清新（新奇）’の中で、‘奇正’、即ち、偏らない正しい‘奇’を受容した。この‘奇’でもって道学の‘本然と天真’に染み込んだ屑や腐って汚いものをなくすことに使用した。

青莊館の学問と文学に接する態度、また、公安派の理論を接する態度は、まさしく‘酌古斟今’の 態度である。この立場から論理を展開してきた本稿は、青莊館の尨大の著述と文学の中で、ほんのわずかな部分を扱ったが、‘酌古斟今’の態度は、彼の尨大の著述を見透かして一貫できると思われる。

本稿では扱わなかったが、明代、前後七子の復古主義（擬古主義）、 清代、王士禎の神韻説に接する青莊館の態度もやはり、公安派を接する態度と同じである。この問題については他の機会にしたいと思う。

参考文献

〈資料〉

李德懋「青莊館全書」。『韓國文集叢刊』 257。258。259。民族文化推進會

李德懋『國譯 青莊館全書』。民族文化推進會

李　珥『栗谷全書』。成均館大 大東文化研究院

李　珥『精言妙選』

〈著書〉

琴東呟（2002）『朝鮮後期 文學理論 研究』。寶庫社。

金昞國（2000）『古典詩歌의 美學 探究』。月印。

金學主（2000）『朝鮮時代 刊行 中國文學 關係書 研究』。ソウル大學校出版部。
趙則誠・張連弟・畢萬愖 主編（1986）『中國古代文學理論辭典』吉林文史出版社。
崔英成（1995）『韓國儒學思想史』Ⅳ。朝鮮後期篇 下。亞細亞文化社。

〈学位論文〉

權政媛（2006）李德懋 初期 散文의 公安派 受容樣相 研究 釜山大 博士學位論文。
李學堂（2005）李德懋 文學 批評에 關한 研究 成均館大 博士學位論文。
魏 紅（2005）李德懋의 明代 文學 批評에 關한 研究。成均館大 碩士學位論文。
李明珍（1983）青莊館 李德懋의 文學研究 梨花女大 碩士學位論文。
崔旭鉉（2004）雅亭 李德懋 《淸脾錄》의 評語 研究 光云大 碩士學位論文。

〈一般論文〉

姜明官（2003）「朝鮮 後期 公安派와 陽明學의 文學的 受容」『古典文學研究의 爭點的 課題와 展望 下』月印。
姜明官（2002）「李德懋와 公安派」『民族文學史研究』21號
柳在日（2000）「『續函海本 淸脾錄』의 發刊 經緯 考察」『人文科學論集』第21輯。淸州大人文科學研究所。
朴文烈（1987）「青莊館 李德懋의 生涯와 著述」『人文科學論集』 第6集 淸州大人文科學研究所。
安大會（2003）「李德懋 小品文의 美學」『古典文學研究』第24輯。
吳壽京（1987）「雅亭 李德懋의 詩論과 ‘朝鮮風’의 性格」『韓國漢文學研究』9.10 合集。
柳在日（1991）「李德懋의 詩文觀」『洌上古典研究』卷4
ー（2000）「『續函海本淸脾錄』의發刊經緯考察」『人文科學論集』第21輯。淸州大人文科學研究所
李庚秀（2004）「李德懋의 神韻論 受容과 漢詩의 文藝美」『韓國漢詩研究』第12輯。
崔博光（1992）「李德懋의 中國體驗과 學問觀」『大東文化研究』27卷1號。
崔信浩（1990）「李德懋 文學論에 있어서의 形似와 寫意 問題」『古典文學研究』第5輯。